

令和6年度4月入学

大学院人間文化総合科学研究科（博士前期課程）入学試験問題

【一 般 選 抜】

言語文化学専攻  
日本アジア言語文化学コース

〔専門科目〕

試験日：令和6年1月27日（土）

注 意

1. この冊子には、次のとおり、2分野、合計5題の問題が綴じられている。  
(総ページ数 — 7ページ)

A群（AⅠ～AⅣ）

B

試験開始に際しては、まず、上記のとおり全問題があることを確認し、脱落がある場合は、挙手により監督官に申し出ること。

2. 各受験者は、A群のうちからいずれか1題を選び、Bの問題と合わせて解答すること。
3. 解答に際しては、A・Bそれぞれ指定された解答用紙を用いること。  
(裏面も使用してよい。)

なお、使用する解答用紙のすべてに受験番号及び氏名を記入すること。

4. 試験終了後、この冊子は持ち帰ること。

A I つぎに挙げるのは、『萬葉集』卷八・一四四七番歌である。これについて後の間に答えよ。

尋常よのつねに 聞者きけばくるし 苦寸① 呼子鳥よぶこどり 音奈都炊おとなつ 時庭成奴② ときにはなりぬ

問一 傍線部①「寸」、傍線部②「炊」について、読み方を平仮名のみで記せ。

問二 二重傍線部「呼子鳥」について、ホトトギスを指すかともいわれているが、次の歌を参考に、萬葉集ではどのような鳥として歌われているか、考察せよ。

大和には 鳴きてか来らむ 呼子鳥 象の中山 呼びそ越ゆなる (卷一・七〇)

神奈備の 磐瀬の杜の 呼子鳥 いたくな鳴きそ 我が恋増さる (卷八・一四一九)

滝の上の 三船の山ゆ 秋津辺に 来鳴き渡るは 誰呼子鳥 (卷九・一七二三)

我が背子を 莫越の山の 呼子鳥 君呼び返せ 夜のふけぬとに (卷十・一八二二)

春日なる 羽易の山ゆ 佐保の内へ 鳴き行くなるは 誰呼子鳥 (卷十・一八二七)

答へぬに な呼びとよめそ 呼子鳥 佐保の山辺を 上り下りに (卷十・一八二八)

朝霧の 八重山越えて 呼子鳥 鳴きや汝が来る やどもあらずに (卷十・一九四一)

問三 波線部「尋常」は漢籍にもみられる言葉であるが、諸本一致して「よのつねに」と訓じられている。このことばに当てられていることが妥当かどう

か、検証するためにはどのように文献を調べて、考察していくのがよいか、知るところを述べよ。

問四 『古今和歌六帖』六の九二二に、当該歌と思しき一首が収載されているが、初句だけが異なっており、「このことばは」とある。この言葉について、語構成を明確にしつつ説明せよ。

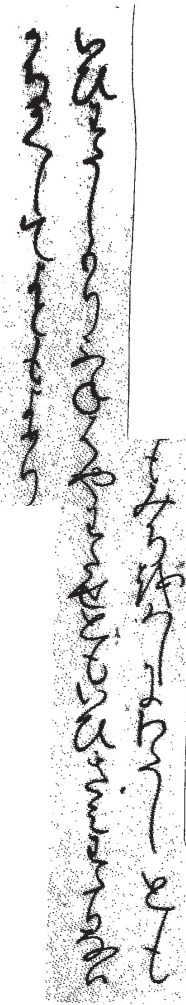
問五 「尋常」と対置される言葉に注意しつつ、一首をわかりやすく解釈せよ。

問六 当該歌は伴坂上郎女の作である。この人物について知るところを述べよ。

A II つぎの文章は、『古今和歌集』秋上・一七七番歌について論じたものである。これを読んで、後の問に答えよ。

A あまの河 あさせしら波 たどりつつ わたりはてねば あげぞしにける

この歌の心は、あまの河の深さに、あさせ白波たどりて、河の岸に立てるほどに、明けぬれば、「今はいかがはせむ」と、逢はでかへりぬるなり。さることやはあるべき。ただの人すら、ひととせを、夜昼恋ひくらして、たまたま、女逢ふべき夜なれば、いかにしても、かまへて渡らむものを。まして、たなばたと申す星宿には、おはせずや。あまの河、深しとて、かへり給ふべきにあらず。いかにいはいむや。その河には、かささきありて、



かたがたに、渡らむことは、さまざまあらじ。わたしもりの、人を渡すは、知る知らぬはあるべき。七夕の、心ざしありて、渡らむとあらむに、わたしもり、などてかいなび申さむ。また、河も、さまざまやは深からむ。かたがたに、心得られぬことなり。

また、ひがごとを詠みたらむ歌を、古今に、躬恒・貫之、まさに入れむや。たとひ、かの人々こそ、あやまちて入れぬ、延喜の聖主、のぞかせ給はざらむや。もし、古今の書きあやまりかと思ひて、あまたの本をみれば、みな「わたりはてねば」とあり。おろさかしき人の、書きたる本にやあらむ、「わたりはつれば」と書ける本もあり。おぼつかなきに、人に尋ね申しは、なほ「わたりはてねば」とあるべきなめり。「わたりはつれば」とあるは、あしきなめり。

かやうのことは、古き歌の、ひとつの姿なり。恋ひかなしみて、立ちあ待ちつることは、ひととせなり。たまたま、待ちつけて、逢へることは、ただ、ひと夜なり。その程の、まことにすくなければ、まことに、逢ひたれど、中々にて、逢はぬかのやうにおぼゆるなり。されば、程のすくなきに、「逢はぬ心ちこそすれ」と詠むべけれど、歌のならひにて、さもよみ、また、逢ひたれど、ひとへに、まだ逢はぬさまに詠めるなり。たとへば、月の、山のはに出でて、山のはに入る、と詠むがごとし。いつかは、月、山より出でて、山には入る。されども、うち見るが、さ見ゆるを、さこそおぼゆれ、とはいはで、ひとへに、山より出づるやうに詠むなり。これのみかは、花を、しら雲に似せ、紅葉を、錦に似せなどするも、ひとへに、それこそはなすめれ。それがやうに、歌も、逢ひながら、逢はずとはいふなり、とこそうけ給はりしか。

『俊頼髓脳』による

問一 冒頭のA歌を、第四句「わたりはてねば」に注意して、現代語訳せよ。

問二 本文中の影印部分を翻字せよ。改行はもとのままとすること。

問三 傍線部1「かたがたに、心得られぬことなり」について、

(a) 筆者は、A歌のどのような解釈に対して「心得られぬ」と言うのか、説明せよ。

(b) 筆者は、なぜ「心得られぬ」と言うのか、詳しく説明せよ。

問四 傍線部2について、「かの人々」「延喜の聖主」が指す人物をそれぞれ明らかにして、現代語訳せよ。

問五 傍線部3「あまたの本をみれば」とあるが、筆者はここでのどのような作業を行ったのか。簡潔に答えよ。

問六 傍線部4について、「さ」の指す内容を明らかにして解釈せよ。

問七 傍線部5は、ここでのどのようなことを言っているのか、A歌の内容に即して具体的に説明せよ。

問八 源俊頼について知るところを詳しく述べよ。

源 ね ぢ

(上)

都より一人の年若き教師下り来りて佐伯の子弟に講學教ふる事殆ど一年、秋の中頃来りて夏の中頃去りぬ。夏之初、渠は城下に住むことを厭ひて、半里隔てし、桂と呼ぶ港の岸に移りつ。こゝより移合に遊ひたり。斯くて海邊にともまること一月、一月の間に言葉かはす程の人誦りしは片手にて數ふるに足らず。其重なる一人は宿の主人なり。或夕、雨降り風起ちて磯打つ波音もや、荒きに、欄を好みて言葉少なき教師もさすがに物淋しく、二階なる一室を下りて主人夫婦が足投げだして涼み居し様先に来りぬ。夫婦は懇づけん

の横なる松、今は幅廣き道路の傍に立ちて夏は涼しき陰を旅人に借ど十餘年の昔は沖より波寄せて節々其根方を洗ひぬ。城下より来りて源叔父の舟楫入るものは海北突出し腰に掛けし事しばしなり、今は火薬の力もて危き崖も裂かれたれど。  
『否、渠どもいかで初より獨尊さんや。』  
『妻は美しかりし。名を百合と呼び、大木島の生なり。人の噂を半偽と見るも、此事のみは信なりと源叔父が或夜酒に呑まれて語りしを聞けば、彼の年二十八九の頃、春の夜更けて妙見の燈も消えし時、ほどほど月たしく者あり。源さきいで離れぞと問ふに、島まで渡し玉(と)いふは女の聲なり。傾きし月の光にすかし見れば兼て見知りし大木島の百合といふ小娘にぞありける。  
『その頃渡船を業となすもの多きうちにも、源が名は浦々にまで聞え

し。そは心たしかに快氣ある若者なりしが故のみならず、別に深き故あり、げに君にも聞かし度きは其頃の源が聲にぞありける。人々は彼が橋こぎつゝ、歌を聴かんとて撰びて彼が舟に乗りたり。されど言葉少なきは今も昔も變らず。  
『島の小女は心ありて斯く眺くも源が舟楫みしか、そは高きより見下し給ひし妙見燈を知らず知る者なき秘密なるべし。舟とめて互に何をか語りしと問ふと、酔ふても言葉少なき彼はたり顔に深き二條の緞寄せて笑ふのみ、其笑は何處となく悲しげなるぞうたてき。  
『源が歌ふ聲はききまじりつ。斯くて若き夫婦の幸しき月日は夢よりも淡く過ぎたり。獅子の幸助七歳の時、妻ゆりは二度目の産重くして遂にみまかりぬ。城下の者に幸助を引取り、ゆくは商人に任立てやらんと言ひいでしがありしも、可愛き妻には死別れ、

問一

どもせず海崎の中に團扇もて敷やがつけし語れり、教師を見て、珍らしやと坐を譲りつ。夕風の風、輕く雨を吹けば一滴二滴、面を拂を三人は心地よげに受けて四面出の船に入りぬ。

問二

其後教師都に歸りてより幾年の月日経ち、或冬の夜、夜更けて一時を過ぎしに獨小机に向ひ手紙讀めぬ。そは故郷なる舊友の許へと書き送るなり。其物案じがほなる若き色、此夜は煙の透少し赤らみて折々何處ともなく眺るまなまし、霧に包まれし或物を定かに視んと願ふが如し。

問六

霧の中には一人の翁立ちたり。教師は筆もきて讀みかへしぬ。讀みかへして目を閉ぢたり。眼を外に閉ぢ内に開けば現れしはまた翁なり。手紙の中に曰く『宿の主人は事もなげに此翁が上を誦りぬ。げに珍からぬ人の身の上のみ、か

問三

る翁を求めんには山の麓、水の邊、國々には澤なるべし。されどわれいかで此翁を忘れ得んや。余には此翁たり何者をか秘め居て誰一人開く事叶はぬ箱の如き思ふ。こは余が例の怪しき念の作用なるべき歟。さもわらばあれ、われ此翁を懐ふ時は遠き笛の音きゝて故郷戀ふる旅人の情、動きつ、又は想高き時の一節讀み了りて限りなき大空を仰ぐが如き心地す。

137

されど教師は翁が上を委しく知れるにあらず。宿の主人より聞き得しは其あらましのみ。主人は何故に此翁の事を斯くも聞ききたりさるか、教師が心解し兼ねたれど聞けるは、いかに語れり。  
『此港は佐伯町に恰好なるべし。見給ふ如く家といふ家幾千ありや、人数は二十にも足らざるべく、淋しさは何時も今宵の如し。されど源叔父が家一軒た。此磯に立ちし其以前の寂さを想ひ給へ。渠が家

140

更に獅子と雖も、は忍び難しとて辭しぬ。言葉少なき彼は此頃より愈言葉少くなりつ、笑ふことも稀に、橋こぎにも酒の勢ならで歌はず、醒醒の入江を夕月の光碎きつゝ、朗らかに歌ふ聲さ、哀をそめたり、こは聞くもの、心にや、あらず、妻失ひし事は元氣よかりし彼が心を半ば碎き去りたり。雨のを降る日あど、淋しき家に幸助一人をこのこし置くは不調なりとて、客と共に舟に乗せゆけば、人々哀れがりぬ。されば小供への土産に城下にて買ひし菓子、袋開きて此孤兒に分つ母稱も少からざりし。父は見知らぬ風にて體も言はぬが常なり、これも悲しみの餘なるべしと心にむる者なし。  
『斯くて二年過ぎぬ。此港の工事半ば成りし頃吾等夫婦、島より此處に移りて此家を建て今この業をはじめぬ。山の端削りて道路開かれ、源叔父が家の前には今の車道でき、朝夕二度に漁船の笛鳴りつ、昔

問四

は網だに干さぬ荒磯は忽ち今の様と變りぬ。されど源叔父が渡船の業は昔のまじなり。浦人島人乗せて城下に往來すること前に變らず、港開けて車道でき人通り繁くありて昔に比ぶれば此處も浮世の仲間入りせしを渠はうれしども將た悲しと思はぬ様なりし。  
『斯くて又三年過ぎぬ。幸助十二歳の時、子供等と海に遊び、眠りて溺れしを、見てありし子供等、畏れ逃げて此事を人に告げざりき。夕暮になりて幸助の歸り來ぬに心つき、驚きて吾等も共に捜せし時は言ふまでもなく事遅れて、哀れの餘は不思議にも源叔父が舟底に沈み居たり。

『渠は最早や決してうたはざりき、朝しき人々にすら言葉かはすことを避くるやうにありぬ。物言はず、歌はず、笑はずして年月を送るうちは如何なる人も世より忘れらるゝ者と見えたり。源叔父の

問五 ↓

舟こぐ事は昔に幾らねど、浦人等は源叔父の舟に乗りながら源叔父の世に在ることを忘れしやうに成りぬ。斯く爾る我身すらをり、源叔父が彼の丸き眼を半ば閉ぢ梅摺ひて降り来るを見る時、源叔父はまだ生きてゐるよなと思ふことあり。渠は如何なる人ぞと問ひ玉ひしは君が初めなり。

『さなり、呼びて酒をませなば途には歌ひますべし。それと其歌の意解し難し。否、渠はつふやがす、操言ならんや、ただをり、太き嘆息するのみ。おはれとぞ呼ばせや』

宿の主人が教師に語りしはこれに過ぎざりし。教師は船に降りて後、源叔父が事忘れず、燈下に坐りて雨の音きく夜も、思ひはしはく、此おはれる翁が上に飛ぶね。思へらく、源叔父は如何、被の音きく、古き春の夜の事思ひて、獨り燈の傍に丸き目ふとさきてや

あらん。或は幸助が事のみ思ひつゝけてや居らんと。されど教師は知らざりき、斯く想ひやりし幾年の後の冬は翁の墓に寒降りつゝありしを。

年若き教師の、詩讀む心にて配慮のペー、マ、シつゝある間に、翁が上には更に悲しき事起りつ、既に此世の人ならざりしなり。斯くて教師の詩は其最後の一節を欠きたり。

(注) ○佐伯——地名。大分県佐伯市。

問一 傍線部1について、

(ア) どのような状況か、説明せよ。  
 (イ) ここに見られる表現上の技巧を説明せよ。

問二 傍線部2は、どういうことを表現しているのか、説明せよ。

問三 傍線部3について、「余が例の怪しき意の作用」とは、どのようなものか、説明せよ。

問四 傍線部4について、そのようになった理由を説明せよ。

問五 傍線部5「古き春の夜の事」とは何か、説明せよ。

問六 二重傍線部について、

(ア) 「宿の主人」が「翁が上」を語ったのは、「手紙」が書かれた現在から見ていつ頃のことか。  
 (イ) 「翁」は、「手紙」が書かれた現在、どうなっているか、説明せよ。

問七 作者の国木田独歩について、その知るところを述べよ。

㊦ つぎの文を読み、後の問に答えよ。

進士李茵、襄陽人。嘗游苑中，見紅葉自御溝流出，上題詩云：「1流水何太急，深宮盡日閑。殷勤謝紅葉，好去到人間。」茵收貯書囊。後僖宗幸蜀，茵奔竄南山民家。見一宮娥，自云宮中侍書，名雲芳子，有才思，茵與之款接。2因見紅葉，嘆曰：「此妾所題也。」同行詣蜀，具述宮中之事。及綿州，逢內官田大人識之，曰：「書家何得在此？」逼令上馬，與之前去，李甚快悵。3其夕，宿逆旅，雲芳復至，曰：「妾已重賂中官，求得從君矣。」乃與俱歸襄陽。數年，李茵疾瘳，有道士言其面有邪氣。雲芳子自陳：「往年綿竹相遇，實已自經而死。感君之意，故相從耳。人鬼殊途，何敢貽患於君。」置酒賦詩，告辭而去矣。

〔太平広記〕卷三五四引『北夢瑣言』による。

〔注〕○上題詩——この「上」は、紅葉の「葉の上」を指す。

○僖宗幸蜀——広明元年（八八〇）、黄巢の乱で長安が陥落すると、僖宗は宦官の田令孜とともに蜀に逃げた。

○宮娥——宮女。

○宮中侍書——後宮の文書を掌る女官。

○書家——侍書に同じ。

○綿竹——地名。ここでは、綿州のこと。

問一 傍線部1について

(a) この詩の平仄を示せ。平は○、仄は●、韻字は◎を用いること。

(b) この詩を解釈せよ。

問二 傍線部2を書き下せ。

問三 傍線部3を現代日本語に訳せ。

(张斌主编《现代汉语描写语法》より)

㊦ つぎの文を読み、後の問に答えよ。

問題文は、著作権の関係で掲載しておりません。

- 問1 下線部 a について、どのようなことか、日本語で具体的に説明せよ。
- 問2 下線部 b について、どのようなことか、日本語で具体的に説明せよ。
- 問3 下線部 c を日本語に訳せ。
- 問4 下線部 d について、これに当てはまる中国語の単音節形態素の例を、本文中に例示されているもの以外で3つ挙げよ。

B つぎの事項のうち、いずれか任意の五つを選んで説明せよ。なお、それぞれの解答のはじめに、何番の事項についての解答であるかをかならず明記すること。

- ① 近江荒都歌
- ② 歌語り
- ③ 日記文学
- ④ 『愚管抄』
- ⑤ 田山花袋
- ⑥ 『奇蹟』
- ⑦ 「文芸的な、余りに文芸的な」
- ⑧ 第三の新人
- ⑨ 音楽の弁別的素性
- ⑩ 動詞の自他
- ⑪ 談話標識
- ⑫ 仮名遣奥山路
- ⑬ 莊子
- ⑭ 「離騷」
- ⑮ 陶淵明
- ⑯ 唐宋古文運動
- ⑰ 『紅樓夢』
- ⑱ 史鉄生

令和6年度4月入学

大学院人間文化総合科学研究科（博士前期課程）入学試験問題

【外国人留学生特別選抜】

言語文化学専攻  
日本アジア言語文化学コース

〔専門科目〕

試験日：令和6年1月27日（土）

注 意

1. この冊子には、次のとおり、3分野、合計6題の問題が綴じられている。  
(総ページ数 — 8ページ)

A群 (A I～AIV)

B

C

試験開始に際しては、まず、上記のとおり全問題があることを確認し、脱落がある場合は、挙手により監督官に申し出ること。

2. 各受験者は、A群のうちからいずれか1題を選び、BおよびCの問題と合わせて解答すること。
3. 解答に際しては、A・B・Cそれぞれ指定された解答用紙を用いること。  
(裏面も使用してよい。)

なお、使用する解答用紙のすべてに受験番号及び氏名を記入すること。

4. 試験終了後、この冊子は持ち帰ること。



A I つぎに挙げるのは、『萬葉集』巻八・一四四七番歌である。これについて後の問に答えよ。

尋常よのつねに 聞者きけばくるし 苦寸くすん 呼子鳥よぶこどり 音奈都炊おとなつ 時庭成奴ときにはなりぬ

問一 傍線部①「寸」、傍線部②「炊」について、読み方を平仮名のみで記せよ。

問二 二重傍線部「呼子鳥」について、ホトトギスを指すかともいわれているが、次の歌を参考に、萬葉集ではどのような鳥として歌われているか、考察せよ。

大和には 鳴きてか来らむ 呼子鳥 象の中山 呼びそ越ゆなる (巻一・七〇)

神奈備の 磐瀬の杜の 呼子鳥 いたくな鳴きそ 我が恋増さる (巻八・一四一九)

滝の上の 三船の山ゆ 秋津辺に 来鳴き渡るは 誰呼子鳥 (巻九・一七二三)

我が背子を 莫越の山の 呼子鳥 君呼び返せ 夜のふけぬとに (巻十・一八二二)

春日なる 羽易の山ゆ 佐保の内へ 鳴き行くなるは 誰呼子鳥 (巻十・一八二七)

答へぬに な呼びとよめそ 呼子鳥 佐保の山辺を 上り下りに (巻十・一八二八)

朝霧の 八重山越えて 呼子鳥 鳴きや汝が来る やどもあらなくに (巻十・一九四二)

問三 傍線部「尋常」は漢籍にもみられる言葉であるが、諸本一致して「よのつねに」と訓じられている。このことは当てられていることが妥当かどうか、検証するためにはどのように文献を調べて、考察していくのがよいか、知るところを述べよ。

問四 『古今和歌六帖』六の九二二に、当該歌と思しき一首が収載されているが、初句だけが異なっており、「とこととはに」とある。この言葉について、語構成を明確にしつつ説明せよ。

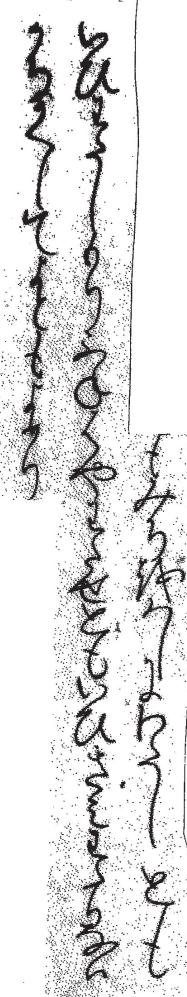
問五 「尋常」と対置される言葉に注意しつつ、一首をわかりやすく解釈せよ。

問六 当該歌は伴坂上郎女の作である。この人物について知るところを述べよ。

A II つぎの文章は、『古今和歌集』秋上・一七七番歌について論じたものである。これを読んで、後の問に答えよ。

A あまの河 あさせしら波 たどりつつ わたりはてねば あけぞしにける

この歌の心は、あまの河の深さに、あさせ白波たどりて、河の岸に立てるほどに、明けぬれば、「今はいかがはせむ」と、逢はでかへりぬるなり。さることやはあるべき。ただの人すら、ひととせを、夜昼恋ひくらしして、たまたま、女逢ふべき夜なれば、いかにしても、かまへて渡らむものを。まして、たなはたと申す星宿には、おはせずや。あまの河、深しとて、かへり給ふべきにあらず。いかにいはずや。その河には、かさざきありて、



かたがたに、渡らむことは、さまたげあらじ。わたしもりの、人を渡すは、知る知らぬはあるべき。七夕の、心ざしありて、渡らむとあらむに、わたしもり、などてかいなび申さむ。また、河も、さまでやは深からむ。かたがたに、心得られぬことなり。

また、ひがごとを詠みたらむ歌を、古今に、躬恒・貫之、まさに入れむやは。たとひ、かの人々こそ、あやまちて入れめ、延喜の聖主、のぞかせ給はざらむやは。もし、古今の書きあやまりかと思ひて、あまたの本をみれば、みな「わたりはてねば」とあり。おろさかしき人の、書きたる本にやあらむ、「わたりはつれば」と書ける本もあり。おぼつかなきに、人に尋ね申しは、なほ「わたりはてねば」とあるべきなめり。「わたりはつれば」とあるは、あしきなめり。

かやうのことは、古き歌の、ひとつの姿なり。恋ひかなしみて、立ち待ちつることは、ひととせなり。たまたま、待ちつけて、逢へることは、ただ、ひと夜なり。その程の、まことにすくなければ、まことには、逢ひたれど、中々にて、逢はぬかのやうにおぼゆるなり。されば、程のすくなきに、「逢はぬ心こそすれ」と詠むべけれど、歌のならひにて、さもよみ、また、逢ひたれど、ひとへに、まだ逢はぬさまに詠めるなり。たとへば、月の、山のはに出でて、山のはに入る、と詠むがごとし。いつかは、月、山より出でて、山には入る。されども、うち見るが、さ見ゆるを、さこそおぼゆれ、とはいはず、ひとへに、山より出づるやうに詠むなり。これのみかは、花を、しら雲に似せ、紅葉を、錦に似せなどするも、ひとへに、それにこそはなすめれ。それがやうに、歌も、逢ひながら、逢はずとはいふなり、とこそうけ給はりしか。

『俊頼髓』による

- 問一 冒頭のA歌を、第四句「わたりはてねば」に注意して、現代語訳せよ。
- 問二 本文中の影印部分を翻字せよ。改行はもとのままとすること。
- 問三 傍線部1「かたがたに、心得られぬことなり」について、
  - (a) 筆者は、A歌のどのような解釈に対して「心得られぬ」と言うのか、説明せよ。
  - (b) 筆者は、なぜ「心得られぬ」と言うのか、詳しく説明せよ。
- 問四 傍線部2について、「かの人々」「延喜の聖主」が指す人物をそれぞれ明らかにして、現代語訳せよ。
- 問五 傍線部3「あまたの本をみれば」とあるが、筆者はここでのどのような作業を行ったのか。簡潔に答えよ。
- 問六 傍線部4について、「さ」の指す内容を明らかにして解釈せよ。
- 問七 傍線部5は、ここでのどのようなことを言っているのか、A歌の内容に即して具体的に説明せよ。
- 問八 源俊頼について知るところを詳しく述べよ。

源おぢ

(上)

都より一人の年若き教師下り来りて佐伯の子弟に語學教ふること殆ど一年、秋の中頃来りて夏の中頃去りぬ。夏の初、渠は城下に住むことを厭ひて、半里隔てし、桂と呼ぶ港の岸に移りつ、こゝより校舎に通ひたり。斯くて海邊にどゞまること一月、一月の間に言葉かはす程の人語りしは片手にて敷ふるにも足らず。其重なる一人は宿の主人なり。或夕、雨降り風起ちて磯打つ波音もや、荒きに、欄を好みて言葉少なき教師もさすがに物淋しく、二階なる一室を下りて主人夫婦が足投げだして涼み居し様先に來りぬ。夫婦は、塵つげん

の横なる松、今は幅廣き道路の傍に立ちて夏は涼しき蔭を旅人に借ど十餘年の昔は沖より波寄せて節々其根方を洗ひぬ。城下より來りて源叔父の舟願まへぬのは海を突出し腰を掛けし事しばしばなり、今は火薬の力もて危き崖も裂かれたれど。『否、渠とていかで初より獨居せんや。』『妻は美しかりし。名を百合と呼び、大木島の生なり。人の噂を半信と見るも、此事のみは信なりと源叔父が或夜酒に呑まれて語りしを聞けば、彼の年二十八九の頃、春の夜更けて妙見の燈も消えし時、はどどと戸たたく者あり。源叔父は離れぞと問ふに、島まで渡し玉へといふは女の聲なり。傾きし月の光にすかし見れば兼て見知りし大木島の百合といふ小娘にぞありける。』その頃渡船を業とすもの多きうらにも、源が名は浦々にまで聞え

し。そは心たしかに伏氣ある若者なりしが故のみならず、別に深き故あり、げに君にも聞かし度きは其頃の源が聲にぞありける。人々は彼が梅こぎつゝ、歌ふを聴かんとて撰びて彼が舟に乗りたり。されど言葉少なきは今も昔も變らず。『島の小女は心ありて斯く呪くも源が舟願みしか、そは高きより見下し給ひし妙見燈を知らず知る者なき秘密なるべし。舟どめて互に何をか語りしと問ふも、酔ふても言葉少なき彼はたゞ顔に深き二條の皺寄せて笑ふのみ、其笑は何處となく悲しげなるぞうたてき。』源が歌ふ聲をききたり。斯くて若き夫婦の幸しき月日は夢よりも淡く過ぎたり。獨子の幸助七歳の時、妻ゆりは二度目の産重くして遂にみまかりぬ。城下の者にて幸助を引取り、ゆくゆくは商人に仕立てやらんと言ひいでしがありしも、可愛き妻には死別れ、

問一 ↓ どもせず薄暗き中に團扇をて蚊やがつかし語れり、教師を見て、珍らしやと坐を譲りつ。夕間の風、輕く雨を吹けば一溜二溜、面を拂を三人は心地よげに受けて四面出の語に入りぬ。其後教師都に歸りてより幾年の月日経ち、或冬の夜、夜更けて一時を過ぎしに獨小机に向ひ手紙認めぬ。そは故郷なる舊友の詩と書き送るなり。其物案じがはなる若き色、此夜は類の遊少し亦らみて折々何處ともなく眺めるまなまし、霧に包まれし或物を定かに視んと願ふが如し。霧の中には一人の翁立ちたり。

問二 ↓

問六 ↓

問三 ↓

る翁を求めんには山の陰、水の邊、國々には澤なるべし。されどわれいかで此翁を忘れ得んや。余には此翁たゞ何者かを秘め居て誰一人開く事叶はぬ箱の如き思す。こは余が例の怪しき意の作用なるべき歟。さもあらばわれ、われ此翁を懐く時は遠き笛の音きいて故郷戀ふる旅人の情、動きつ、又は想高き詩の一節讀み了りて限りなき大空を仰ぐが如き心地す。』されど教師は翁が上を委しく知れるにあらず。宿の主人より聞き得しは其からしのみ。主人は何故に此翁の事を斯くも聞きたいとさるか、教師が心解し兼ねたれど問はるゝに、語れり。『此港は佐伯町に恰好なるべし。見給ふ如く家といふ家幾子ありや、人数は二十にも足らざるべく、淋しさは何時も今宵の如し。されど源叔父が家一軒たゞ此磯に立ちし其以前の想を想ひ給へ。渠が家

問四 ↓ 更に獨子と離るゝは忍び難しとて辭しぬ。言葉少なき彼は此頃より愈言葉少くなりつ、笑ふことも稀に、梅こぎにも酒の勢ならでは歌はず、醒醒の入江を夕月の光碎きつ、朝らかに歌を聲さへ哀をそめたり、こは聞くものゝ心にや、あらず、妻失ひし事は元氣よかりし彼が心を半ば砕き去りたり。雨のそぼ降る日や、淋しき家に幸助一人をのこし置かば不問なりとて、客と共に舟に乗せゆれば、人々哀れがりぬ。されば小供への土産に城下にて買ひし菓子袋を開きて此孤見に分つ母親も少からざりし。父は見知らぬ風にて禮も言はぬが常なり、これも悲しみの餘なるべしと心にとむる者なし。『斯くて二年過ぎぬ。此港の工事半ば成りし頃吾等夫婦、島より此處に移りて此家を建て今この業をはじめぬ。山の端削りて道路開かれ、源叔父が家の前には今の車道でき、朝夕二度に渡船の笛鳴りつ、昔

は網だに干さぬ荒磯は忽ち今の様と變りぬ。されど源叔父が渡船の業は昔のままなり。浦人島人乗せて城下に往來すること前に變らず、港開けて車道でき人通り繁くありて昔に比ぶれば此處も世の仲間入りせしを業はうれしども將た悲しども思はぬ様なりし。『斯くて又三年過ぎぬ。幸助十二歳の時、子供等と海に遊び、誤りて溺れしを、見てありし子供等、畏れ逃げて此事を人に告げざりき。夕暮になりて幸助の歸り來ぬに心づき、驚きて吾等と共に捜せし時は言ふまでもなく事遅れて、哀れの骸は不思議にも源叔父が舟底に沈み居たり。』渠は最早や決してうたはざりき。親しき人々にすら言葉かはすことを避くるやうにありぬ。物言はず、歌はず、笑はずして年月を送るうちには如何なる人も世より忘れらるゝ者と見えたり。源叔父の

舟こゝ事は昔に變らねど、浦人等は源叔父の舟に乗りながら源叔父の世に在ることを忘れしやうになりぬ。斯く爾る我身すらをり、源叔父が彼の丸き眼を半は閉ぢ橋搦ひて歸り來るを見る時、源叔父はまだ生きてあるよなと思ふことあり。渠は如何なる人ぞと問ひ玉ひしは君が初めなり。

『さなり、呼びて酒をませなば悉には歌ひますべし。されど其歌の意解し難し。否、渠はつづやがず、操言ならんず、ただをり、太き嘆息するのみ。おはれとぞばさずや——』

宿の主人が教師に語りしはこれに過ぎざりし。教師は都に歸りて後、源叔父が事忘れず、燈下に坐りて雨の音きく夜も、思ひはしはく、此おはれる翁が上に飛びぬ。思へらく、源叔父今は如何、彼の音きく、古き春の夜の事思ひて獨り燈の傍に丸き目をさめてや

問五 ↓

おらん、或は幸助が事のみ思ひつとけてや居らんと。されど教師は知らざりき、斯く想ひやりし幾年の後の冬の夜は翁の墓に突降りつゝありしを。

年若き教師の、詩讀む心にて記憶のペリマ驟(しつゝ)ある間に、翁が上には更に悲しき事起りつ、既に此世の人ならざりしなり。斯くて教師の詩は其最後の二節を欠きたり。

(注) ○佐伯——地名。大分県佐伯市。

問一 傍線部1について、

(ア)どのような状況か、説明せよ。

(イ)ここに見られる表現上の技巧を説明せよ。

問二 傍線部2は、どういうことを表現しているのか、説明せよ。

問三 傍線部3について、「余が例の怪しき意の作用」とは、どのようなものか、説明せよ。

問四 傍線部4について、そのようになった理由を説明せよ。

問五 傍線部5「古き春の夜の事」とは何か、説明せよ。

問六 二重傍線部について、

(ア)「宿の主人」が「翁が上」を語ったのは、「手紙」が書かれた現在から見ていつ頃のことか。

(イ)「翁」は、「手紙」が書かれた現在、どうなっているか、説明せよ。

問七 作者の国木田独歩について、その知るところを述べよ。

A IV つぎの㉑・㉒の間に、すべて答えよ。

㉑ つぎの文を読み、後の間に答えよ。

進士李茵、襄陽人。嘗游苑中、見紅葉自御溝流出、上題詩云：「流水何太急、深宮盡日閑。殷勤謝紅葉、好去到人間。」茵收貯書囊。後僖宗幸蜀、茵奔竄南山民家。見一宮娥、自云宮中侍書、名雲芳子、有才思、茵與之款接。<sup>2</sup>因見紅葉、嘆曰：「此妾所題也。」同行詣蜀、具述宮中之事。及綿州、逢內官田大人識之、曰：「書家何得在此？」逼令上馬、與之前去、李甚快悵。<sup>3</sup>其夕、宿逆旅、雲芳復至、曰：「妾已重賂中官、求得從君矣。」乃與俱歸襄陽。數年、李茵疾瘳、有道士言其面有邪氣。雲芳子自陳：「往年綿竹相遇、實已自經而死。感君之意、故相從耳。人鬼殊途、何敢貽患於君。」置酒賦詩、告辭而去矣。

〔太平広記〕卷三五四引『北夢瑣言』による

(注) ○上題詩——この「上」は、紅葉の「葉の上」を指す。

○僖宗幸蜀——広明元年(八八〇)、黄巢の乱で長安が陥落すると、僖宗は宦官の田令孜とともに蜀に逃げた。

○宮娥——宮女。 ○宮中侍書——後宮の文書を掌る女官。 ○書家——侍書に同じ。 ○綿竹——地名。ここでは、綿州のこと。

問一 傍線部1について

- (a) この詩の平仄を示せ。平は○、仄は●、韻字は◎を用いること。  
(b) この詩を解釈せよ。

問二 傍線部2を書き下せ。

問三 傍線部3を現代日本語に訳せ。

問題文は、著作権の関係で掲載しておりません。

(张斌主编《现代汉语描写语法》より)

- 問1 下線部 a について、どのようなことか、日本語で具体的に説明せよ。  
問2 下線部 b について、どのようなことか、日本語で具体的に説明せよ。  
問3 下線部 c を日本語に訳せ。  
問4 下線部 d について、これに当てはまる中国語の単音節形態素の例を、本文中に例示されているもの以外で3つ挙げよ。

㉑ つぎの文を読み、後の間に答えよ。

B

つぎの事項のうち、いずれか任意の三つを選んで説明せよ。なお、それぞれの解答のはじめに、何番の事項についての解答であるかをかならず明記すること。

- ① 近江荒都歌
- ② 歌語り
- ③ 日記文学
- ④ 『愚管抄』
- ⑤ 田山花袋
- ⑥ 『奇蹟』
- ⑦ 「文芸的な、余りに文芸的な」
- ⑧ 第三の新人
- ⑨ 音素の弁別的素性
- ⑩ 動詞の自他
- ⑪ 談話標識
- ⑫ 仮名遣奥山路
- ⑬ 荘子
- ⑭ 「離騷」
- ⑮ 陶淵明
- ⑯ 唐宋古文運動
- ⑰ 『紅樓夢』
- ⑱ 史鉄生

C あなたの研究しようとしているテーマは何か、またそれに対してどのようなアプローチを試みるつもりかを、具体的に論述せよ。